

万象点描



農的社會デザイン研究所代表 蔦谷 栄一氏

荒れ地開いた農民の結末

先日、「NPO現代座」の理事長であり劇作家の木村侠さんにお目にかかって直接お話を伺う機会に恵まれた。昨年8月に木村さんが執筆・出版された『共生の大地・アリアンサ』を購入するために、東京都小金井市にある現代座会館を訪れた折のことである。

本書はブラジルのサンパウロ州アリアンサにあるユバ農場の歴史と活動を通じて、日本政府の移住政策の実態に迫ろうとしたものである。ユバ農場は、日系移民の手によって、農業と芸術を一体化し、農業をやりながらパレエ・芝居をはじめとする文化活動とともに、共生・協同を目指した運営を展開してきた。まさに「国の移住政策に逆らって、自分たちの自治による理想の移住地をつくらうと闘った大

■ 共生・協同の神髄

正時代の男達たち」のドラマ」が掘り起こされている。その木村さんが目下取り組んでいるのが、合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」(仮)の地域興しプロジェクトによる上演である。江戸中期に、多摩郡押立村(現在の府中市押立)の名主であった川崎平右衛門が、武蔵野台地開発を成し遂げた話である。

1707年に東日本大震災にも匹敵する宝永大地震が発生し、これに続いて富士山が大噴火した。これらの影響で飢饉(ききん)が続発し、幕府は復興事業とその資金の手当てに追われることになる。その復興が滞る中、16年、8代将軍に就任したのが、紀州藩主で宝永大地震による津波災害からの復興に手腕を發揮した徳川吉宗であり、吉宗が南町奉行に抜擢(はってき)して

共に享保の改革に取り組んだのが大岡越前守忠相である。享保の改革、そして復興の目玉となったのが、武蔵野台地での新田開発である。ここは「不毛の大地」といわれ、16年間もの試行錯誤を繰り返しながらも、一向に開発は進展を見なかった。そこで吉宗が行ったのが「世襲の役人に代えて、現場で復興事業に取り組んでいる農民・町人の中から優れた人材を抜擢」することで、新田82カ村建設の責任者として任命されたのが平右衛門であった。平右衛門は「自分たちの村は自分たちでつくるという方針で、世帯主だけでなく、村中の女、老人も含めた全体が助け合う村づくりを進めました。村の施設は自分たちでつくり、飢饉のための食料の備蓄、荒れ地でも育つ換金作物の普及を協同で進め、現在の協同組合のような仕組みをつかって」新田開発を成功させた。武蔵野台地を食料基地に変えることにより、その後の江戸発展の基礎を築いたともいえる。天保の大飢饉が襲う中、大原幽学が先祖株組合を結成したのが1838年、二宮尊徳が最初の報徳社を設立したのが43年であるから、その100年も前の話である。協同組合の前身としても興味深い。震災復興に協同の力が不可欠であることを教えてくれる。そして市民参加による上演・地域興しは、協同組合が時代としっかり向き合っていることの重要性を示唆しているように受け止めた。

つたや・えいいち 1948年生まれ、宮城県出身。東北大学経済学部卒業後、71年農林中央金庫に入庫。熊本支店長、農業部副部長、常務取締役などを経て2013年10月から現職。主な著書に『地域からの農業復興』『共生と提携のコミュニティ農業へ』『協同組合の時代と農協の役割』『都市農業を守る』『日本農業のランドデザイン』などがある。